
親愛なるきみに捧げる一通の手紙

マッキー☆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親愛なるきみに捧げる一通の手紙

【Nコード】

N0228S

【作者名】

マッキー☆

【あらすじ】

親愛なるきみに捧げる一通の手紙

目次

- 一 プロローグを書く理由
- 二 栄子を嫌いになった理由
- 三 琴美と別れた理由
- 四 髪を気にするようになった理由
- 五 文学部に行かない理由
- 六 早乙女が自分に惚れていると思った理由
- 七 由紀を怒らせた理由
- 八 仕事をうまくできない理由
- 九 夜遅くまで残業するようになった理由
- 十 サトラレだと知った理由
- 十一 亡命しようとした理由
- 十二 それでもX社に復帰した理由
- 十三 どうしてもX社をやめたくなかった理由
- 十四 人見に告白しなかった理由
- 十五 X社をやめなければならなかった理由
- 十六 人々の幸福と平和を祈った理由
- 十七 ツイッターをやめた理由
- 十八 この手紙をきみに書く理由

一 プロローグを書く理由

はじめまして。そう言ったら、きみは驚くかもしれないね。
きみは、おれとはまったく関わりのない人間で、おれの文章を読

むのも、きっと初めてだろう。

きみはおれに対して、好意も、敵意も、もしかしたら多少の関心ですら、持っていないのかもしれない。そんなきみに対して、最後まで読んで欲しいと考えるのは、おれのわがままにすぎないことぐらい、自分でもわかつている。

でも、この手紙という形をとった小説は、きみが最後まで読んで初めて完成するんだ。だから、おれと一緒にこの小説を完成させてほしい。

今、世界では、様々なことが起こっている。日本やニュージランドでは、大震災があったし、中東では、大規模な独裁政権に対するデモが行われている。そのために、多くの人が傷ついた。こういった時期に、小説を公開することは不謹慎かもしれない。自分勝手かもしれない。きみがそう感じたのなら、その通りだと思う。だけど、こういう時期だからこそ、おれは公開したいと思った。もし、この小説を商業出版する価値があると考えた人がいたら、勝手に出版していい。ネットに公開した時点で、著作権は放棄した。それで、もし売上が出るようなことがあれば、震災で傷ついた人やまずしい人々のために、使ってもらいたい。

ただ、初めに言っておきたいのは、おれは平和主義者で、暴力を好まないということだ。だから、この手紙を読んだからといって、それを理由に暴力に訴えることは絶対にやめてほしい。それは、おれが主張していることと、真逆のことだからだ。

今まで、ネットを使って平和や幸福を訴えてきた。だけど、どんなにおれが平和を訴えても、勘違いする人がいるかもしれない。今のところ、おれの訴えを読んでいる人がいたしても少数だからよかったけど、そういう可能性がある人には、この手紙を読んでももらいたくない。それを前提としてわかってくれる人だけが、読み進めてほしい。

おれにはどうしても言いたいことがあるし、主張すべき考えがある。それは、おれ個人にとって、とても重要なことだし、文字通り

命を賭けてでもすべきことだと思う。

これから話すことは、まぎれもなく、おれの物語だ。おれが現実
に体験したことをベースに書いてある。

もちろん、プライバシーの問題もある。知り合いが読んで、まる
っきり現実と同じように描かれていたら、人権の侵害に当たってし
まう可能性がある。

そのため、家族、友人、知り合いに迷惑をかけないように、一部
事実を変えて書いているところもある。特に、家族に対する記述を
避けた。その方が家族を危険にさらさないと思ったからだ。だから、
この小説には、家族の話はほとんど出てこない。大切なのは、すべ
ての真実をありのまま書くことではなくて、自分の伝えたいことを
はっきりと盛り込むことだ。

それに、現実には、今までの人生において、いろんな人との絡み
があることを、書いているうちに気がついた。それをありのままに
書こうとすると、登場人物が多すぎて、読みづらいものになってし
まう。

だから、一人の人間に、何人かとの出来事を整理したり、修正し
たりした。それでも、伝えたい芯がぶれなければ、問題ないと思う。
重要なのは、小説の形式ではないからだ。この小説が、私小説なの
か、ノンフィクションなのか、そういう分類はあまり重要ではない。
それと、きみがあまり小説を読むことに慣れていないことも考慮
して、できるだけ簡潔に書き、わかりやすく伝えることを心がけた。
全体としても、薄い本一冊程度の長さのものにした。それでも、き
みが読みづらいと感じることもあるかもしれない。それはおれの力
不足なんだけど、きみが最後まで読んでくれる、わずかな可能性に
かけて、おれは書いていくよ。

まず、おれのことを簡単に説明しよう。頭はよくも悪くもなく、
決して一流とは言えない大学に行って、そこその会社に就職した。
でも、就職した会社では、徹底的にいじめられ、友人からは無視さ
れ、精神病にかかってしまった。

その頃、おれの周りで、おかしいことが起きていた。おれの家族、友人、知り合いが怪我や病気になっていったんだ。それは偶然かもしれない。おれに関係していると考えた、おれの妄想かもしれない。

だけど、おれはそのことに対して、意味があるんじゃないかと疑ったんだ。だから、おれはそのことをミクシイに日記として書いた。おれがどんなことで苦しんでいるか、周りの人間がどんな状態にあるか、正確ではないけれど、おれなりの表現で書かせてもらった。

そういった日々を繰り返し、おれはいつからか、おれが誰かと会うとその人が傷つくのではないかと思うようになったんだ。それから、おれは日記を読んだ友人も傷つくのではないかという発想に至るまで、たいした時間はかからなかった。

おれには、言いたいことがたくさんあった。苦しいこと、つらいこと、悲しいこと、さびしいこと、叫びたいこと、いろいろあったんだ。

だけど、おれは突然、前触れもなく、ミクシイをやめたんだ。それは、おれの日記を読んでもくれる、親愛なる友人のことを考えたからだ。

あくまで、可能性にすぎないが、おれの日記を見ることにより、傷つく人がいたとしよう。もし、そうなら、おれはミクシイを続けられない。

だってそうだろう。友人を危険にさらしてまで、自分の個人的な主張をするべきだろうか。おれには、友人を犠牲にしてまで、主張すべきことなど、何一つなかった。

だから、おれはミクシイで日記を書くのをやめたんだ。その後、ツイッターを始めるようになるけれど、その出来事は終盤で話そうと思う。

ミクシイをやめてからしばらくの間、おれは他人に、自分の苦境を打ち明ける機会を失った。

おれ一人が、我慢すればいい。そうすれば、おれ以外は誰も傷つかない、そう思ったんだ。だから、おれは友人と会うこともやめた。

それは、おれにとって、とてつもなくつらいことだった。習い事もせず、勉強もせず、仕事もせず、友人とも会わずに過ごしている。そんな毎日を送った。おれはそんな日々耐えられなかった。

その時、おれはいろいろ考えたんだ。おれやおれを取り巻く環境、おれの未来について、真剣に、悩んでいたんだ。そこで、ある結論に至った。

肌の色で差別があったように、侵略戦争で傷ついた人がいたように、宗教を信仰する自由が奪われたように、おれが世間に徹底的にいじめられていることは、そういった事柄と無関係ではないと思うようになったんだ。

おれは普通とはちよつと違うところがあるかもしれない。そのために、いろいろな責め苦を受けているとするならば、それはおれだけの問題ではない。

おれが一人、差別を受けているとするならば、きみだって、差別の対象になるかもしれない。きみはおれほど変わっていないかもしれないが、世界には、誰一人として、同じ人間などいないからだ。その違いがあるからこそ、人間は子供を産むことができるし、繁栄することができたからだ。

おれが今、追いつめられているのは、おれが他の人との違いによるものならば、口を閉ざしてはいけないと思った。おれが口を閉ざせば、他の差別も肯定してしまうことになるからだ。今はなくなつた差別でも、また復活してしまうかもしれないからだ。

だから、おれは小説という形を取って、きみに手紙を書くことにした。それは、もちろん、自分のためでもあるけど、おれが手紙を書くことにより、世界がより安全で平和になればいいと思ったからだ。

いくら差別や戦争が終わろうとも、おれのような、一人の人間を徹底的にいじめるようなことをしている限り、世界は本当の平和とは言えない。少なくとも、おれはそう思う。

だけど、ともおれは考えた。友人が傷つく可能性があるのに、ま

た友人に見せるのか。おれは友人を傷つける可能性がある限り、この小説を友人に見せるべきではないと思った。そのため、この小説は誰にも読んでもらっていない。読むのは、きみが最初だ。だから誤字や脱字が目立つかもしれない。できるだけチェックしたつもりだけど、あったらごめん。

これから、この小説は、読み手のきみが存在するものとして書いていく。きみが存在している可能性は、ほとんどない。きみが読み始めたとしても、最後まで読む可能性は限りなく低い。

それでもこの手紙を書くのは、きみへのSOSのメッセージだからだ。ネットという海に小ビンに入っただまま漂う、SOSの手紙だからだ。

この小説の中では、おれの名前は鈴木として、登場する。できるだけ、リアルに感じてもらいたいと思い、本名を使うことにした。それと、きみには敬語を使わない。おれは、親友に語りかけるように、きみに伝えたいからだ。

おれは今、死人も同然だ。仕事もできず、大学にも行けず、習い事もできず、友人にも会えず、恋人もいない。自由に、友達と会うこともできないなんて、刑務所に入っているみたいだ。

おれは小説に関して言えば、プロではなく、素人だ。きみを満足させるような、作品かどうかかわからない。それでも、小説という媒介を通して、きみがおれの心に触れ、おれはきみの心に触れる。

それは一見、おれからきみへの一方的なメッセージのように思えるが、実際は一方的なものではなく、対等に、お互いを尊重して、心と心で握手するようなものだ。人間は、きみは、そういったことができる生き物だ。

おれはたとえ、どんな目に会っても、このまま、自由のないまま、孤独と絶望にさいなまれたまま、死を迎えようとも、誰も恨まないことにした。

それは、心の根底で、人間を信じているからだ。人間の奥底に光る、善なる心を信じているからだ。きみを、きみの存在を、心のど

こかで信じているからだ。

きみがおれに愛情を持って接しようとしてくれる限り、おれは見ることのできない、きみの愛情に、触れることができるからだ。包まれているからだ。

おれにとつて、現実とは、とてつもなく、つらく、きびしい。おれが、いくら社会に対して、絶望していることを書いても、きみに全部を伝えることは不可能だろう。

また、世の中を見渡せば、不幸には際限がない。世の中は殺人事件で満ち溢れているし、今回の地震では大勢の人が死に、今も多くの人が傷ついている。ネットで不幸な話を探したら、いくらでも見つかるだろう。おれの話なんて、不幸というカテゴリーにすら入らないかもしれない。

だから、この小説は、いかに自分が不幸かを書いたものではない。まして、作者が自分に対して同情しているように感じてしまう小説は、きみにとつても、読むに堪えないものになると思う。

きみが日本人なら、いや日本人でなくても、この気持ちはわかるかもしれない。おれの勝手な考えだが、日本人の多くは、同情を侮辱だと感じるように思える。

なぜなら、同情するということは、その人間を自分より下に見ていると考えるからだ。その考え方が正しいかどうかは別として、おれがこの小説を書く理由は、はっきり言って同情してほしいからではない。

おれは、働いていた頃の会社の上司から言われた言葉が、何年も経っている今でも、頭から離れない。自分に同情するような人間にはなるなよ、と。

きみはこの言葉を聞いて、どう思う？ 優れた助言だと思うか、それとも一方的な意見だと感じるか。一見、ドラマでも使われそうな、かっこいいセリフのようだ。もしくは、もっと詳しい状況がわからないと、何とも言えないと思うのだろうか。

おれはこの言葉を聞いた時、なんて自分勝手に意味のない言葉な

のだと思った。だって、そうだろう。上司は、おれが自分に同情している姿を見たくないから、傷つきたくないから、そう言っていたのだ。その上司は後で出てくるけど、強がっていても、繊細で、傷つきやすい人なのだ。

その言葉を言われた当時、おれは心の中で激しく反発したが、今は違う。その言葉は、少し言い方を変えれば、とても価値ある言葉だ。

おれが思うに、自分に同情すること自体は、一概に悪いこととは言えない。それは自分で自分の心を慰め、浄化する作用があるからだ。だけど、自分に同情するだけでは、現実は何も変わらない。現実を変えるためには、何か行動をすることが必要だ。

おれが、今、現実を変えるためにできること。おれはそれを長い時間かけて、ずっと考えていた。そして、おれはある結論に至った。おれが現実を変えるためにできること、やっぱりそれは、小説を書くことだ。小説という形を用いて、きみへの手紙を書き、おれの現状を訴え、おれと一緒に、おれとおれを取り巻く環境の未来について、考えて欲しいのだ。おれの未来が変わるなら、今もどこかで虐げられている人、あるいは差別にあっている人の未来も一緒に変えられるかもしれないからだ。

そんなこととしても、現実是不変でない、きみは思うかもしれない。それから、賢いきみは、こうおれに指摘するだろう。

仮に、この小説を読む人がいるとして、いったい何人が読む？

五人、十人？ それで未来が変わるようには思えない。

それに対し、おれは答える。確かにきみの言う通りだ。きみは正しい。

おれの、この手紙を読む人は、十人いないかもしれない。だけど、五人読んだとして、その中で一人でもいい、心が少しでも動かされる人がいたのならば、おれにとって、書く価値のある小説だ。

一人の心に影響があるということは、その人を取り巻く何人かにも影響があるかもしれないからだ。

おれが変わり、きみが変われば、おれの取り巻く環境にも変化があるかもしれないからだ。その可能性は、ごくわずかかもしれない。そんな奇跡を期待するなんて、ばかげているのかもしれない。

それでも、おれは書く。途中でやめたくなくなったり、一人でむなしくなることもあるだろうけど、おれは完成を目指して書き続ける。

それは、きみの存在を信じているからだ。きみが、善人であることを心の底から信じているからだ。

きみが、どのような国籍、肌の色、信仰する宗教を持っているかは、おれにとっては大きな問題ではない。

おれが、実際に会うことはない、きみに対して深い友情を感じているように、きみがおれに対し、友情を感じてもらいたいからだ。

おれはきみへの手紙を書くことを通じて、自分の過去の意味や価値を変えようと試みている。自分の過去が変えられるなら、自分の未来も変えられるかもしれないからだ。自分の未来が変えられるなら、自分の運命が変えられるかもしれないからだ。

その可能性はわずかだ。人の運命はそう簡単に変わるものではないからだ。それでもおれは、きみのことを想って書き続ける。

これが、きみに送る、初めての手紙だ。そして、最後の手紙になって欲しい。おれが自由を手に入れたのなら、もう手紙を書く必要はなくなる。

長くなっただけ、プロローグの最後に言っておきたいことがある。たとえば、きみがつまらないとか、時間がないとか、その他の理由とかで、この手紙を最後まで読むことができなかったとしても、ここまで読んでくれてありがとう。そのことに、ただただ、感謝する。きみと、きみを取り巻くすべてのものに、感謝と、幸福と、平和を想って、祈る。

さあ、前置きはここまでにして、本論に入ろう。

二 栄子を嫌いになった理由

どこから話すのが、きみに一番興味を持ってもらえるか。おれは考えた末、高校時代から話すことにした。

その前に簡単に出生について話そう。おれは1983年の夏に神奈川県で生まれた。昭和で言えば、58年だ。

幼少期のおれは、育ての母親が大好きで、いつもくっついて歩いていた。素直で、笑顔の絶えない、子供だった。日本はその頃景気もよかったし、幸福な幼少期だった。

もちろん、幼少期に変わったエピソードがないわけじゃない。三歳になった時には、コンビニに行って一人で買い物をしていたし、小さい頃は高確率で当たりくじを引ける人間だった。

大人になってから、当たりくじを引く能力はなくなってしまったが、当時は当たりくじが入っているお菓子が、光って見えたのだ。

でも、今回おれが小説を書く目的は、おれがどれだけ他人と違っているかではないので、ここでは深く書かない。

1989年になると、日本では昭和から平成に変わった。おれが、まだ幼稚園児で、5歳の時だった。子供のおれには、それが何を意味するかわからなかったし、最近まで興味はなかった。ただ、今はその話はおいておこう。

きみは異性と付き合ったことはあるだろうか。たくさん付き合ってきた、もしくは結婚している、あるいは恋愛をしたことがないかもしれない。ただ、どんな人であれ、人の初恋には興味があると思う。人が人を好きになるというのは、人間の根源に関わる行為だからだ。

だから、今回は、おれの変わっているところの話ではなくて、付き合ったとは言えないかもしれないけど、初恋の話をしたいと思う。この話を聞くことで、きみがおれのことを変わった人間としてだけでなく、ありふれた一面も持っているのだということを知ってもらいたいからだ。

おれは1999年、平成で言えば11年に高校に入学した。入学したのは、15歳の時だった。高校は、公立高校に入学した。高校

に入った当初は、部活には所属していなかった。それは、中学生の時に、部活で散々いじめられたからだ。中学生の頃は、バスケット部に所属していたが、先輩や帰国子女の男に毎日必要以上にいびられた。おれにとって、部活は楽しいものではなかった。

16歳の誕生日を迎えて、夏休みが終わった後、おれは友達を誘って陸上部に入った。足はこれでも速い方なんだ。リレーでならば、県大会に出たこともある。今回はその時の恋の話だ。もちろん、この小説で登場する人物は、おれ以外はすべて仮名だ。

おれは同じ陸上部で同級生の栄子を好きになった。高校一年生の時は、栄子と同じクラスでもあったんだ。

それと、高校一年生の時に、おれのクラスに海外からの留学生がいた。彼女は、アンナと言った。もちろん仮名だ。この時は、留学生を一人も受け入れていない公立の高校で、なぜおれのクラスだけ、留学生がいるのかわからなかった。その理由は後ほどわかることになる。話を戻そう。

栄子を初めて見た時は、栄子のことを何とも思わなかった。異性を見た瞬間に、電撃が走ったという人がいるけれど、当時のおれは女性をあまり意識していなかったので、そういう感覚はなかった。

おれは陸上部で、同じクラスで、栄子と一緒に過ごすうちに、栄子のことがどんどん好きになっていった。初めて、本気で恋だった。

栄子が部活中の柔軟運動で見せたしなやかな体が、部活の帰り道のバスの中で話している時の心を許した笑顔が、汗を流しながら一生懸命走っている時の真剣な表情が、おれには魅力的に見えたんだ。2000年の元旦には、栄子と何人かの友達で初日の出を見に行った。日の出の時間までは、ファミレスで暖まっていた。

その日は鼻水が出るくらい寒かったせいもあって、あまり見やすい場所を発見できなくて、結局、知らないビルの上階の廊下で初日の出を見ることにした。それでも、栄子と一緒にいた人の中で、誰よりも喜んでいたし、感動を精いっぱい身振りで伝えていた。そ

んな幸せそうな栄子を見ると、おれも幸せな気分になった。栄子と共有の思い出ができたことが嬉しかった。

四月になって、高校二年生になった。陸上部にも新入生が入ってきた。テスト期間中の部活がない日に、栄子と一緒に帰る機会があった。栄子とは、帰りのバスが同じだったので、よく一緒になった。バスを降りてから近くのファーストフード店に栄子を誘った。栄子とはよく遊んでいたけれど、二人きりになることは珍しかった。

オレンジジュースを飲みながら、栄子と仲良く話していると、おれは栄子のことをたまらなく愛しく思えた。栄子と話していると、魔法のようにお互いに言葉が溢れてきて、いつまでも楽しい時間を過ごすことができた。

会話が恋愛の話になると、栄子はいたずらっぽく尋ねた。

「鈴木くんは好きな人いるの？」

おれは栄子が好きだと言えず、話を濁した。

いや、正確には、当時のおれはごまかせたつもりだったんだ。だけど、ごまかせてなかった。それはなぜか。きみに言っていなかった重要なことがある。おれの変った能力についてだ。

おれの変った能力とは、考えていることが、言わなくても伝わってしまう能力のことなんだ。日本では、この能力のことをサトラレと呼んでいる。おれはサトラレだったので、この時点で、栄子には、おれが彼女のことを好きなことは、ばれていたんだ。そのことを前提に読んでもらいたい。話を戻そう。

ジュースを飲みきった後も、おれは栄子とお互いの恋愛観を話していた。栄子は時折おれに誰が好きかと聞いて、言えないおれをかわらかった。そんな些細なやりとりが、お互いの心を手探りで触り合っているようで、くすぐったかった。栄子と話すと、時間はいくらあっても足りなかった。

日が傾き始めたので、栄子を家まで送っていくことにした。その帰り道の途中も、恋愛の話で盛り上がった。

「無理して好きな人を言わなくていいよ」

栄子はいつまでも好きな人の名前を言いだせないおれに対して、逃げ道を作ってくれた。でも、そんなやさしく笑いかけてくる栄子を見ていると、いつのまにか、どうしても栄子に告白したくなっていた。

「栄子の家に着くまでに教えるよ」

「別にいいのに」

栄子は道に落ちている小石を蹴った。太陽はだいぶ落ちてきていたが、おれの気持ちは高ぶっていた。興奮しながらも一歩踏み出せない自分に苛立ちながら、気がつくまで栄子の家の近くになっていた。「ありがと。送ってくれるのはここまででいいよ」

栄子が手を振って別れようとする、おれは戸惑った。告白するチャンスは今しかないと思った。

「また明日会おうね」

「待ってくれ」

栄子がおれの方に振り向き、おれの言葉の続きを待っていた。

「おれは、栄子のことが好きなんだ。付き合ってほしい」

おれの声は緊張で震えていた。初めてした、告白だった。告白の言葉はありきたりだが、それ以外に何も浮かばなかった。

栄子は黙り込んで何も言わなかった。ただ、まっすぐに、おれの瞳を見つめていた。周りに人はいなかった。夕日がやけに印象的だった。普通の街並みがいつもと違って、神秘的に、輝いて見えた。

おれがどう反応していいか困っていると、栄子は突然、思いつきり泣き始めた。しばらくの間、おれは栄子の泣く姿を茫然と眺めていた。やがて栄子はゆっくりと口を開いた。

「他に好きな男がいるの。告白したんだけどはっきりと返事をもらえていないんだ」

確かそんな内容だったと思う。おれはショックのあまり、思考が停止していた。栄子はその男のことをいかに好きか、おれに説明しただした。

ただ、当時のおれが、栄子の話を聞きながら考えていたことは、

まったく別のことだった。泣いている栄子を見て、おれは美しいと思っていた。夕日に照らされた栄子の顔や髪に触れてみたかった。

だけど、振られたおれには、無理だった。その時の経験が、あまりにも鮮明に残っていて、おれは泣いている女性を美しいと思うようになったんだ。

おれが美しいと思うのは、もちろん、暴力を振るわれて悲しんで泣いている女性ではない。なんでかよくわからないけど、感情豊かに泣く女性を見て、おれは美しいと感じるようになったのだ。

いつまでも栄子は泣きやまなかった。そんな栄子を見ると、振った男がひどい人間のように思えてきた。

「そんなはつきりと態度を示さない男はやめておいた方がいい」

栄子はしばらく泣いていたが、ふと泣きやんで、顔を上げた。

「それでも好きなの」

栄子は泣き声でか細くつぶやいた。おれと栄子の主張は平行線だった。栄子の目は赤くなっていた。

「もう大丈夫だから。鈴木くんは家に帰って」

無理やり笑顔を作っている栄子に対し、どう答えるか迷っていると、栄子が続けた。

「お願い」

「わかった」

おれは逃げるように、栄子の前から去った。帰り道に、関係ない友達からメールが来ても、気づかない振りをした。おれの心の中にはそれどころではなかった。家に帰ってから、茫然としていた。特に、悲しくはなかった。ただ、複雑な感情が渦巻いていた。

その日はなかなか眠れなかったが、それでも、なんとか眠ることはできた。次の日は、家族の誰よりも早く目が覚めてしまった。それから、家の中をうろうろと歩きまわり、言いようのない感情が溢れてきた。

おれは、たまらず押入れの陰で静かに泣いた。振られた実感は一日遅れでやってきた。おれはその時になってやっと、振られてしま

ったのだと理解できたのだ。

学校に行くと、栄子がたまたまゲタ箱にいたので、顔を合わせた。
「おはよう」

栄子は昨日の泣き顔と違って、笑顔であいさつしてきた。でも、なんとなく、ぎこちない笑顔だった。おれがおはようと返すと、それ以上会話は続かなくて、おれは足早に去った。今まで、栄子と話すとは魔法のように言葉が溢れて来たのが、嘘みたいだった。

栄子はおれを振った後も、一日も休まず毎日部活に来た。栄子に、特に変わった様子はなかった。楽しそうに笑っている栄子を遠巻きに見ていた。そんな表情の栄子を見るたびに、胸が苦しくなった。一週間以上経った部活の後、家に帰ってふとんに寝そべっていると、栄子からメールが来た。おれは驚きと不安でいっぱいになりながら、メールを見た。

「私も振られたみたい」

おれは興奮しながら、栄子に急いでメールを打った。

「それならおれと付き合おうよ」

そう打ってから、ふとんにごろんと寝転んだ。

栄子からの返事はすぐに来なかった。おれはなかなか眠れなくて、30分置きに栄子からメールが来ていないかチェックした。その日は、とうとう栄子から返事は来なかった。

次の日の授業中に、眠い目をこすっていると、栄子からメールが来た。

「私でよかったら、付き合いたい」

おれは一気にテンションが上がって机を叩きそうになった。ジェットコースターに乗った後みたいだった。言葉にならない興奮が、おれの中を駆け巡っていた。でも、メールを続けていると、栄子は一つ付き合う条件をつけた。

「付き合っていることを、誰にも言わないで欲しいんだ」

「栄子と付き合えるなら、それでも構わないよ」

おれはすぐにメールを打って返した。でも、今思えば、変な約束

だ。きみはもう知っているだろうが、おれはサトラレだ。もちろん、当時のおれは知らなかったけれど、栄子はおれにそんな約束しても、無駄だということはわかっていたはずだ。

おれは確かに誰にも言わなかったが、言わなくても、付き合っていることは伝わってしまう。どうして、栄子はそんなことを言ったのだろう。きみならば、わかるだろうか。今はとにかく、話を進めよう。

おれはその日から、栄子と付き合いだした。付き合うといっても、部活の仲間には隠していたので、見つからないように目配せをしたり、一緒に帰ったりするだけだった。だけど、そんな些細なことだけでも、おれには幸せだったんだ。

おれは毎日、栄子に電話をかけた。栄子の声が聞きたかった。最初かけた時は、栄子と一時間ぐらい話したが、だんだん栄子は、理由をつけて電話に出なくなっていた。おれが焦れば焦る程、栄子を求めれば求める程、栄子はおれと距離を取りたがっているようだった。

ある日、栄子が別れたいとメールで送ってきた。付き合いから、たった二週間しか経っていなかった。

おれはどうとう言われてしまったという諦めの気持ちと、別れたくないという気持ちが複雑に絡み合っていた。

メールで栄子に直接話したいと伝えた。栄子はおれの家の近くに來ているというので、コンビニの前に着くと、暗がりの中にたたずむ栄子がいた。

「鈴木くん、もう別れよう。やっぱり、合わないよ」

栄子は、おれの顔を見るとすぐに切り出した。抑揚のない、感情がどこかに消えてしまったような、話し方だった。

栄子の表情は、かつて見せた泣き顔ではなかった。ただ、コンビニから少し離れていたために光が弱く、栄子の表情は読み取れなかった。

「まだ付き合ったばかりだよ。もう少し、試してみようよ」

栄子は首を振った。

「だめみたい。頑張ったけど、鈴木くんのは好きになれそうにない」

おれは、正直納得がいかなかった。栄子に対して、怒りを隠せてなかったと思う。

「どうして、好きになれないの？ なぜ、おれじゃダメなの？」

おれの興奮した問い詰めに、栄子は表情を崩さずに淡々と答えた。「やっぱり、以前告白した人のことが忘れられないみたい。鈴木くんはタイプじゃないから、好きになれない。ごめん」

「そう、なんだ」

それならば、おれと付き合ってもいいなんて、初めから言わなければいい。そう思った。栄子の身勝手ぶりに嫌気がさした。だから、その日以来、おれは栄子のが嫌いになった。

「もう、帰るね」

「わかった。送っていいか？ もう暗いし」

おれは栄子に対する怒りとは裏腹に、栄子を家まで送ろうと考えていた。それが、おれにできる、精いっぱいの見栄だった。栄子に、余裕がないことを知られたくなかった。

「もう、甘えられないから」

栄子がつぶやくと、おれはそれ以上何も言えなかった。夜道の中に消えていく栄子を止めることはできなかった。だけど、おれの心にともった栄子に対する想いは、栄子が夜道に消えたようには、簡単には消せなかった。

それ以降、おれは部活でも栄子とあまり会話をしなくなり、高校卒業後も二人で会ったことはない。

唯一会ったことがあるとすれば、それは同窓会だ。同窓会では、何度も栄子と視線が合ったが、おれは気付かない振りをして、会話は一度もしなかった。栄子は時折おれのことを見ていたが、話しかけてくる様子はなかった。おれは何もしなかった。

でも、ここまで読んで、きみはおれの本音をわかってしまったか

もしれないね。おれはその当時、栄子の身勝手さに怒っていたが、裏を返せば、栄子を好きという感情を消せないために、怒ることでごまかしていたんだ。今になって、ようやくそのことがわかったんだ。栄子は今、幸せに暮らしているだろうか。おれは会うことはできないが、栄子の幸せを心の底から祈っている。

簡単に説明したけど、これがおれの初恋だ。

きみは、おれの初恋の話を聞いて、どう思った？ 等身大の、普通の感性を持った人間だということを理解してもらえただろうか。

おれが特別な存在ではなく、きみとなんら変わらない、恋愛感情を持った人間だと感じてもらえたら、それ以上嬉しいことはない。

今回の話では、まともに付き合ったとは言えないかもしれない。だけど、次にする話はおれの人生の中で、唯一まともに女性と付き合った時の話だ。おれの人生の中では、かなり幸せだった時期になる。

次の話を読んで、きみが異性と付き合ったばかりの頃の思い出がよみがえってきてくれたのなら、それだけでこの小説を書いた価値はあったと思う。では、次の話に移ろう。

三 琴美と別れた理由

おれが初めて小説を書いたのは、高校一年生の時だったと思う。その時、担当だった国語の先生は変わっていて、授業で、有名な小説の続きを自分で考えて書くという課題出したんだ。

どんな内容を書いたかは覚えていないが、おれは真剣に取り組んでいた。大まじめだったにも関わらず、おれの小説を読んだ友人は笑っていた。今では、小説を書くきっかけを与えてくれた先生に感謝している。たぶん、そのことがなければ、おれは小説を書くとは思わなかった。

それから、通信教育で募集していた、学生向けの短編小説に応募した。おれなりの推理小説だった。結果は惨敗だったので、それ以

上小説に固執することではなく、すっかり忘れて高校生活を満喫した。今思えば、高校時代が一番幸せだったかもしれない。おれには一緒に遊ぶ友人がいて、陸上で走った時のタイムを競うライバルがいて、恋もした。

2001年の春に、高校三年生になると、新入生が入ってきた。琴美はその中の一人だった。琴美は髪が長く、小柄で、笑うとえくぼができるところがチャームポイントだった。

琴美と初めて話したのは、陸上部のげた箱の前だ。遠慮がちに、おれのPHS（当時は携帯ではなく、PHSが流行っていた）のアドレスを聞いてきた。琴美の初めて見た時の印象は、とても恥ずかしがり屋の女の子だった。アドレスを聞くと、すぐに走って去ってしまった。

おれが自宅に帰った後、琴美にメールすると、琴美は好きな芸能人とか、音楽とか、いろいろとおれに聞いてきた。おれは一つ一つ答え、いつしか琴美からメールが来るのを楽しみにしていた。

メールを一週間ぐらい続けた後に、部活の帰り道を歩いていると、琴美からメールが来た。開くと、おれは思考が停止した。

「鈴木先輩のこと、好きになってもいいですか？」

おれは一気に興奮した。おれは恋に飢えていたので、心底嬉しかった。女の子に好意を伝えられたのは、これが初めてだった。

「琴美のことを可愛いと思っている。だから、琴美と付き合いたい。ただ、陸上部の引退試合を控えているから、試合が終わるまで待つてほしい」

「わかりました。待っています」

琴美とのメールを終えると、おれは家まで走って帰った。体中がエネルギーに溢れていた。それぐらい、女性と付き合えることが嬉しかった。

大会の日、おれは最後の試合で、ベストを更新するどころか、以前の試合よりタイムが遅くなってしまった。

自分がふがいなかったのか、もう二度と陸上部で試合に出ること

がないことが悲しかったのか、なんだかよくわからないけど、人目をはばからず、競技場の隅で泣いてしまった。

こう言うと、きみはおれのことを涙もろい人間だと思うかもしれないね。だけど、おれは映画や小説を読んで一度も泣いたことはない。おれの人生のハイライトを中心に話しているから、泣き虫なような印象を受けるかもしれないけど、実際はめったに泣くことはないんだ。

おれは部活引退後、琴美と付き合うようになった。バイクの中型の免許はいつか女の子を後ろに乗せたいと考えて取ったので、ちょうどよかった。

二人でバイクに乗って映画を見に行ったのが、おれの初めてのデートだった。琴美は初めの遠慮がちな印象と違い、物事をはっきりととらえて発言するタイプの人間だった。一緒に夕飯を食べながら、お互いに映画がつまらなかったと、笑って言い合えた。その心を許した空気が、おれにはたまらなく愛しかったんだ。

そのデートした時は、五月ぐらいだけど、夜にバイクに乗るのは寒かった。琴美には、バイクに乗るから厚着をしてきてね、と告げていたが、琴美は薄着にスカートだった。琴美はあまり人の話を聞くタイプではないということを学んだが、そんなところが逆にかわいらしく思えた。

「先輩、寒いよ」

バイクに乗って信号待ちしていると、ヘルメット越しでも伝わるように、琴美が声を張り上げた。おれはバイクを歩道に止めて、上着を脱いだ。

「ありがとう。大好き」

おれはその言葉に照れて笑った。人に好きだと言われることが、こんなにくすぐったいこととは知らなかった。

その後、再びバイクにまたがって走り出した。大きな道路でスピードが出ていたため、Tシャツ一枚で寒かったのは確かだ。今だから言えるけど、風邪を引くかと思った。だけど、琴美のさっきの言

葉を聞いたら、寒いから返せとは言えなかった。それに、その分、おれの腰に手を回す琴美の手が温かく感じられた。

それから、休日は琴美と毎週のようにデートした。高校の頃は、お互いにお金がなかったので、二人の遊び場は主に公園だった。二人で、誰もいない公園に行き、樹木の陰に隠れて何時間も抱き合った。服の上からでも、琴美の柔らかさが伝わってきた。ただ、それだけのことで心は満たされ、いつまでも続けばいいと思った。付き合った当初の琴美は、よく笑い、冗談をたくさん言った。

おれは公園にいる時に琴美と抱き合ったりしたけど、あまりキスはしなかった。琴美からすれば奇妙な男だったに違いない。きみもそう思うだろうか。

おれが琴美とあまりキスしなかったのは、琴美のことが好きではなかったからではなくて、キスをする则自分の感情が抑えられそうになかったからだ。媚薬を飲まされたような、頭がおかしくなりそうなくらい、琴美のことが愛おしくなってしまうからだ。

おれは、そんな琴美なしでは生きられない自分を弱い人間だと感じ、琴美に見せたくなかったからだ。だから、おれはあまり琴美とキスをしなかった。

おれの行動は、琴美からしてみれば不可解な部分も多かったかもしれないが、おれなりの愛情表現だったんだ。おれは、確かに変わっている。だけど、おれはおれなりの基準を持って、琴美のことを愛していたんだ。

普通の人が持つ愛の形とは、多少違ふかもしれないけど、おれは愛情を注ぐことのできる人間なんだ。琴美のことが、本当に、本当に、好きだったんだ。だけど、最終的には、琴美の心はおれから離れてしまった。

琴美は、もともと明るい人間だったが、時間が経つにつれ、よく泣くようになった。

夏休みに大学見学に行った時も、大学に向かう商店街の中で琴美は突然泣きだした。おれはどうしていいかわからず、喫茶店に入っ

て、琴美が泣きやむのを待った。琴美は頼んだ紅茶には、なかなか口をつけなかった。琴美が泣きやんでから、おれは理由を聞いた。

「どうして泣きだしたの？」

「言いたくない」

そうはつきりと告げる琴美からは、最初の素直で明るい印象はなかった。それでも、おれはしつこく聞いた。それは、琴美のことをもっと理解したかったからだ。悩みを共有したかったからだ。お互いの絆をもっと深めたかったからだ。

琴美は、言いたくないと一点張りだったが、やがて、意外なことを口にした。

「他の女の人ばかり、見ているからだよ」

「そんなの仕方ないじゃないか」

「仕方なくない。謝って」

琴美が語尾を強めたので、おれは少し考えてから謝った。

「ごめん」

「わかってくれたのならいいよ。行こう」

琴美は笑顔になって立ち上がった。さっきまで泣いていたのが、嘘みたいだった。

おれは正直納得がいかなかった。他の女を見てはいけないというのなら、世界中の男は付き合っている女にいつも謝らなくてはならないことになる。だけど、何度もしつこく聞いて琴美の機嫌を損ねたくなかったので、それ以上聞かなかった。

それから、琴美とは何度かデートした。琴美は会うたびに泣いていたが、理由は何度聞いても言いたくないと繰り返すだけで、教えてくれなかった。

しまいに、おれは琴美がとても涙もろい人間なのだと判断して、琴美が泣いていてもあまり気にしないようになった。いくら聞いても、理由を話してくれない琴美に対して、苛立ってもいた。琴美は、おれのことを信頼していないのだと感じた。

夏休みが終わる前に、琴美はメールで別れたいと送ってきた。お

れは怒って、絶対に別れないと琴美を説得した。琴美はおれの説得に対し、その時は一応納得してくれた。

それから一・二回デートしたけど、琴美は元気がなく、ぎくしゃくした感じになって、会話もあまり続かなかった。

なんとなくデートを誘いづらくなって、琴美と会わなくなって半月経った後、もう一度、琴美から別れを切りだされた。おれは諦めて承諾することにしたが、せめて別れる理由を知りたいと思い、会って話したいと伝えた。

琴美と別れ話をした公園のことを今でもはっきりと覚えている。それは、琴美と初めてキスをした公園だった。二人の始まりと終わりが同じ公園で行われるなんて、不思議な感覚だった。

おれと琴美は、付き合った頃のように、公園のベンチに座って話をしていた。琴美は笑顔で、余裕のある表情のように見えた。

「やっぱり、おれと別れたいの？」

「別れたい」

「どうしてもだめ？」

「ごめん」

おれは琴美の言葉を聞いて、空を見上げた。空にはほとんど雲がなかった。公園の樹木は、濃い緑色に生い茂っていたが、秋の気配を感じた葉が、数枚だけ紅葉していた。

「そうか」

おれが溜め息をつくとき、琴美は急に激しく泣きだした。おれには何かなんだかわからなかった。

琴美は嗚咽を漏らしながら、早足で公園の出口に向かって歩き出した。おれは追いかけることもできたけど、あえて追いかけてなかった。泣いている琴美に対して、おれはいつも無力で、どう対応していいかわからなかった。

家に帰ってから、琴美のことばかり考えていた。琴美が泣いた理由を知りたかったし、琴美のことを大事に考えていたことを伝えなかった。気持ちが高ぶって我慢できなくなり、琴美のことがいか

に好きだったかを含めてメールにして送った。かなり長々と書いた記憶がある。

おれは、琴美に対して愛情表現が下手だったかもしれないし、変わっていたのかもしれないし、街中で女を見るといろいろ妄想していたかもしれない。だけど、その当時、おれが愛情を持って接していたのは、琴美だったんだ。そのことを琴美にも理解してもらいたかった。だけど、琴美から返事はなかった。

おれは後日、琴美が陸上部でいじめられていたという話を聞いた。琴美はそのことを相談したかったのではないか。当時はそう思ったんだ。琴美がいじめられていた理由は誰からも聞けなかった。

おれはもう二度と琴美にメールを送らないと思ってはいたけど、いじめられていた話を聞いてから、迷ったあげく、琴美にもう一度だけメールを送った。

彼氏として、気づいてあげられなくて、つらい思いをさせて、ごめん、そう謝ったんだ。琴美が今まで泣いていたのは、いじめられていたからではないかと考えた。だけど、そのメールについても、琴美から返事はなかったの、真相は結局わからなかった。

もう連絡先もわからないし、連絡しようとも思わないけど、琴美が、素晴らしい男性と出会って、幸せな生活を送っていることを祈っている。今のおれにできることは、それだけだ。

きみはおれがまともに付き合った時の話を聞いてどう思った？

今までの説明では、琴美と別れた理由としては、十分ではないのかもしれない。でも、今考えても、よくわからないんだ。

琴美が泣きながら公園を出ようとした時、琴美のことが好きだ、別れたくない、そう告げて抱きしめるべきだったのだろうか。だけど、琴美はもうおれと別れる決心をしていたし、おれにはどうしようもなかったんだ。

次に話すのは、おれのコンプレックスの話だ。今まで誰にも深く話したことはないが、こういう時にこそ話すべきだと思ったので、きみに聞いてもらいたい。

四 髪を気にするようになった理由

おれは琴美に振られた後、かなり自暴自棄になっていた。琴美が、すぐに他の男と付き合いだしたという話を噂で聞いた。

陸上部の友達は、琴美は別に鈴木じゃなくて他の男でもよかったんだ、だから別れて正解だったと話していたが、おれには到底受け入れられなかった。おれは本気で琴美のことが好きだったし、大事に思っていた。それが琴美に通じていなかったと思うと、つらかった。

受験のプレッシャーも大きかった。おれはノイローゼだったし、スケープゴートを求めている。自分で自分を傷つけたかった。もちろん、傷つけないといった矛盾した感情を持ち合わせていた。

おれは自分を簡単に傷つける人間は他人も傷つけられると思っている。だけど、当時のおれには、それがわからなかったんだ。だから、苦しさを気付いて欲しいというサインとして、自分を傷つけた。

おれがはけ口として求めたのは、髪だ。おれは何度も髪を染めて傷つけたせいか、おでこが広くなったことを気にしていた。他人が注目していると思っていた。

実際に、少ないというレベルではなかったし、今思えば、完全な自意識過剰だけれど、当時のおれにとっては、それが真実だった。

琴美に振られ、しかも自分の愛を否定された苦しさを、いくら勉強しても偏差値が上がらない不満を、両親とうまくいかない苦悩を、教師に叱責される怒りを、すべておれの髪が悪いのだと思い込むようになっていた。

だから、おれは自分で髪を引っこ抜いたり、勉強中にシャーペンの芯で傷つけたりした。そして、おれは自分で髪を切るようになり、マッシュルームカットにした。これならば、おでこを見られないと思ったからだ。当時のおれは、誰かにおれのことを悪くないのだと

言ってもらいたかった。

おれは毎日のように学校に着くと、トイレの鏡で自分の髪をチェックして、溜め息をついた。学校に行くこと自体が、苦痛だった。自分の容姿は劣っているという、コンプレックスに支配されていた。おれは毎日遅刻して、教師に怒られていたし、学校をさぼって図書館で勉強したりしていた。今思えば、社会不適応者になる一歩手前だった。

そんな状況なのに、当時のおれは、医学に興味を持っていた。でも、医学の道に進むことは許されなかったと思う。おれが病人であることがわかってしまうからだ。

親に医学部に行きたいことを告げたが、お金がかかるからと反対された。でも、それで諦める程度だったので、本気で行きたかったわけではなかった。

結局、髪の状態ばかり気にして、勉強にはあまり集中できない日々を過ごしていた。2002年になって、受験が間近に迫っても、それは変わらなかった。結果として、医学部の代わりに受験した薬学部もすべて落ちてしまった。

浪人に突入すると、おれは髪を美容院で切った。薬学部を諦め、化学科を目指すことにした。おれは予備校を変え、心機一転で浪人生活を始めた。

浪人中は思ったよりもつらくなかった。元々内向的な人間なので、一人で勉強することには、あまり苦痛を感じなかった。

予備校には、いろんな人達がいたけれど、琴美に振られた傷が癒えていなかったし、髪も気にしていたので、誰とも仲良くすることができなかった。もちろん、予備校の中に、可愛いと思う女の子もいたんだ。熊のぬいぐるみが似合いそうな感じの女の子だったけれど、とうとう一度も会話することがなかった。コンプレックスが邪魔して、話しかける勇気が生まれなかったんだ。浪人中に、予備校でできた友達は一人もいない。

人生で、一番殻に閉じこもっていた時期かもしれない。おれはで

きるだけ外との接触を断とうとしていた。かといって、自分の内面を見つめたりもしなかった。

何も見ていなかったし、何も聞いていなかった。何のために生きているかでさえ、わからなかった。ただ、自分の心が傷つかないように、心の溝を作って生活していた。

おれは予備校が検討違いの問題ばかりやっている疑問に感じ、やめて大手予備校のビデオ講習で勉強するようになった。

ある時、前に聞いたことがある、髪の毛の病院に行き、外用薬とシャンプーを処方してもらった。おれは先生に、高校三年生の時にいかにつらい受験生活だったかを話した。

おれは、必死で勉強していたのにもかかわらず、周りに邪魔されている気がしていることも話した。そのことを話しながら、涙が自然とこぼれた。こういう込み入った話をできる大人が、今まで誰もいなかったことに気がついた。

先生は、髪をスケープゴートにしていたんだね、と教えてくれた。確かに、今思えばその通りだ。おれは、髪を傷つけることで、自分がつらい状況にいることを知ってもらいたかったんだ。なぜ、ここまで執拗に、おれを怒る人間がいたのかわからない。だけど、そのせいで勉強に集中できなかったなんて、言い訳したくなかった。髪に八つ当たりしていたことを知って以降、心の整理がついて、あまり髪のことを気にしなくなった。

現在、高校を卒業してから十年以上経とうしているにも関わらず、おれの髪はあまり少なくなっていない。それは医療が発達したからだ。そのことには、本当に感謝している。ただ、発毛薬として、承認されているプロペシアはおそらく偽物だろう。海外で発売されたので、処方してもらうには、海外に行くしかなかった。数年後、日本でも承認されたが、少しの間飲んでみたが、効果はなかった。話を戻そう。

一年浪人しても、おれの偏差値は上がらず、むしろ下がっていた。そう考えると、浪人の一年はあまりよい一年だったとは言えなかつ

た。

浪人中は、詩を携帯で書いて友達に送ったりしていた。家の近くの大きな木をテーマにしたりした。小説を書いてみたいという思いはあったけれど、受験が終わるまで我慢することにした。

その後、おれは化学科をいくつも受験したが、ある工業大学の化学科にしか受からなかった。偏差値があまり高くなかったのも、もう一年浪人したいと親に話したが、浪人させるお金はないと言われ、しぶしぶ工業大学に入った。

おれは、学校の勉強だけ見れば、特別優秀ではなかった。特にできない科目はなかったけど、特別できる科目はなかった。一生懸命勉強はしたし、勉強自体は嫌いじゃなかったのにも関わらず、あまり偏差値は高くなかった。

ただ、今思えば、おれが進学する大学は元々決められていたように感じる。二年間に、10以上受験して、一つだけ受かるというのも、不自然な気がする。偏差値自体は、似たようなところもいくつか受けていた。

どういう理由によるかはあくまで推測の域でしかないけど、おれは医学部や薬学部に進んではいけないかったのかもしれない。

他の大学に受験した時、絶対に合格したと思ったのに、補欠だったこともある。点数が合格ラインのぎりぎりで、入学希望者が少なかったら、入ることができるというものだった。だけど、結局、人数は足りたみたいで、おれはその大学に入ることができなかった。その大学の方が都心にあるので両方選べていたら、利便性の高い大学を選んでいた。

ただ、おれの偏差値があまり高くなかったのは、確かなことだ。もう一度受験したとしても、偏差値の高い大学に行くことは不可能だろう。おれが工業大学にしか合格しなかったのは、二つの理由があると思う。一つは、アジアの留学生しか受け入れていないこと、もう一つは、女性が少ないために、付き合っている男性が少なくてもおかしくないことだろう。女性の多い大学に行って、みんな付き

合っているのに、おれだけ付き合えないとなれば、おれが傷つくと考えたのだろう。

ここまですが、おれの高校時代だ。おれはきみのことを想像する。きみは、小説を読むことに慣れていないかもしれない。だから、できるだけテンポよく書こうと思う。重要ではないところを、長く書いても、読む時間の無駄になってしまいうからね。それに、この手紙は、おれが生まれてから現在に至るまでを書いてあるから、時間の尺度を短くしないと、いくらでも長くなってしまふ。

ところで、きみはどんな高校生活を過ごしただろうか。たくさん友人を作り、恋をしてきただろうか。

きみがどんな思い出を抱えているにせよ、学生生活の思い出というのは、楽しいものへと変容していく。若さとエネルギーに充ち溢れた記憶というのは、それだけで素晴らしいものだ。

これからのきみの人生も、学生の時に味わったような、エネルギーと希望に満ちたものであるといい。おれの手紙をここまで読んでくれたきみに対し、そう願うのはおれからのささやかなお礼だ。

では、大学生活に話を移そう。

五 文学部に行かない理由

工業大学に入学すると、大学は男ばかりで、異性の出会いが少なかった。バドミントンサークルに入っただけで、女の子が一人もいなかった。すぐをやめた。女の子と仲良くする以外に、サークルに入る理由はなかった。講義を受けるためだけに大学に通った。男の友人に、彼女がいる人はほとんどいなかった。たぶん、おれに氣遣って、いない振りをしてくれたのだろう。

おれが大学に入っただけで思ったのは、なんて講義はつまらないのだろうということだった。大学の講義がつまらないと言っているわけではなくて、おれはどの大学に入ったとしても、理系の講義だったらそう感じたと思う。受験の時だけ気合の入った、完全なる燃

え尽き症候群だった。

工業大学に在籍しながら、わずかに設置された文系の講義ばかりを取っていた。その中で、文学と出会い、本を読む喜びを知るようになった。

特に、感銘を受けたのは、トルーマン・カポーティの潜在意識をテーマにした小説だった。人の無意識の領域を小説で表す方法が画期的だった。

空いた時間には、古本屋で手に入りづらい小説を買いあさるのが趣味になっていた。しかし、理系の科目も取らないと、卒業できないので、必要最低限は取るようにした。

大学一年生の頃になって、ようやく視野が広がってきて、自分がコンプレックスの塊であることを自覚した。それはきつと、速読のおかげだ。

当時のおれは本当に小心者で、友人に馬鹿にされることを何よりも恐れていた。自分が他人より劣っているという思いが強かった。心の周りに溝を掘って、誰にも侵入できないようにしていた。でも、少しずつそのことに気付いていったら、心が軽くなった。

今まで過去ばかり見ていたことに気づき、コンプレックスを超えて、未来向きの人生を生きようと思うようになった。おれにとって、2003年は人生の大きなターニングポイントだった。

大学に入学して、バイトを転々しながら、貯金を貯めていった。あまり長い間、同じバイトを続けることはなかった。貯金がある程度貯まると、再び小説を書いてみたくなり、小説教室を訪ねた。

その当時、おれと同年代が芥川賞を取るというニュースが日本中を駆け巡っていた。最年少受賞だった。きみも芥川賞については、聞いたことがあるかもしれない。日本の文学賞で、もっとも有名な賞の一つだ。

同年代なのに、そういった脚光を浴びている人達がいることに興奮し、嫉妬した。若くても、才能と運さえあれば、大きな賞をもらうことだって、不可能ではないのだと感じた。実際に、年齢に限ら

ず、若くても才能を開花させた人や優れた人格者は少なからずいる。ただ、多くの実績や経験が伴っていないと、賞をもらうことが難しいのが現状なのだ。

それに、あまり若い人に賞をあげると、評価した人達が、まだ早いのではないかとバッシングを受ける危険性だってある。そういう批判を恐れずに、若い人に賞をあげるというのは、勇気のある行為だと思う。そういったこともあって、最年少の芥川賞の受賞は当時の日本で大きく報道された。

しかし、この当時のおれの小説は、書き始めたばかりだったので、とても小説とは言えないものばかりで、小説教室の先生を困らせた。小説教室での執筆活動は楽しかった。おれが書く小説は、シュールリアリズムだね、と先生には評価された。たぶん、おれの言いたいことがあまり伝わってなくて、そう言ったのだと思う。

おれから言わせれば、おれの書く小説は、現存している小説とは、明らかに異なっていた。元々、おれはかなり自由な発想をするタイプの人間で、授業中に取るノートのマス目すら守らない人間だった。だから、二行に一文字を書いたりする時もあった。小説を書くにあたって、読む人の共感と呼ぶか、一般的なモラルに則したもののか、という考えはおれにはなかったし、既存のものをまねしようという発想もなかった。

ただ、なんとなく浮かんできたものを、一気に書きあげてことを繰り返した。その頃は、おれの内面はごちゃごちゃしていたので、内容も筋が通っていないものが多かった。作品の質としては、限りなく低かったが、同時におれが持つ独特の世界観があり、奇妙な魅力も宿していた。

小説を書くことに喜びを覚えたが、おれは教室をやめることにした。どうせなら、文学部に行って、文学を習ってみたいと思ったからだ。そのため、編入試験に備え、勉強に専念することにしたんだ。おれは工業大学の単位を取りながら受験勉強をした。受験の時期は、2005年の一月頃だったと思う。結果として、おれは文学部

に合格した。だけど、文学部には行かなかった。

結果だけ見れば、文学部に行くことは不可能ではなかった。おれの興味が文学に移っていたのは明確だったし、偏差値が低かったの
で、大学側が落とす理由がなかった。だから、行こうと思えば、行
けないこともなかった。

ただ、文学部に行くことに両親がきっぱりと反対していた。将来
のことを考えると、工業大学で卒業すべきだと主張された。それが、
おれのためだと説得された。

親が大学の費用を払っていたので、親の意向も考えなければなら
ないと思い、迷った。夜間に設置された学科というのも気になっ
ていた。結局、迷った末に工業大学で卒業することにした。

もし、きみがおれの立場だったら、どのような選択をしただろう
か。きみだったら、好きな道を選択していたかもしれないね。

だけど、今思えば、文学部に行かなくて正解だったかもしれない。
おれは小説を書くことは好きだったけど、あまり読むことは好きで
はないことを最近知ったから。

きみは、美術、音楽、文学のどれが得意だろうか。おれは、きみ
のことを想像する。きみは絵がうまいかもしれないし、リズム感が
いいかもしれない。あるいは、詩や小説を書くことがうまいのかも
しれない。もしかしたら、好きだけど、どれも得意ではないと言
うかもしれない。

でも、おれはきみの優れたところを知っている。きみはきつと、
心の優れた人だ。ここまでおれがきみにあてた手紙を読んでもくれた
のだから。貴重な時間を割いて、誰の添削も受けていない、素人の
小説を読むなんて、なかなかできることじゃない。

これから、もう少し、大学時代のことを語ろうと思う。まだまだ、
佳境には入っていないけど、少しずつ感情の込め方を強くしていく
つもりだ。きみとの心のキャッチボールが、最後まで続くことを願
う。

六 早乙女が自分に惚れていると思った理由

文学部に入るために、小説を書くことをやめたが、結局文学部に行かないことにしても小説を書くことはなくなっていた。代わりに、大学三年生になると、毎日が理系科目と実験で追われていた。たいしてやる気がなかったもので、さぼってボーリングばかりしていた。恋人はいなかったけど、男友達がたくさんいて、ある意味楽しい時期だった。

おれは大学生になって恋をした。恋をしたのは久しぶりだった。おれが高校を卒業してから恋をしていなかったのは、心のバリアを張っていたからだ。だけど、コンプレックスに気づくうちに、バリアが少しずつ溶けて、周りの人間にも再び興味を持つようになった。おれが恋した相手が早乙女だ。茶髪に緩くウェーブをかけた女性で、動きがふわふわしているというか、シャボン玉が似合いそうな、独特の空気の持ち主で、人の目をよく見つめる人だった。

おれは早乙女の瞳に、いつも吸い寄せられるような引力を感じていたが、それはきっとおれだけではなく、多くの男が感じていたに違いない。早乙女は誰に対してもやさしく、フレンドリーに接した。おれが早乙女と初めて会話をしたのは、ある実験の実習だった。実験室で、ガラス器具を受け取って席に戻ると、早乙女が座っていた。それまで早乙女のことをはつきりと見たことがなかった。

「ありがとう。実験器具取ってきてくれたんだ」

「いや」

おれはそう言うてから、おれの瞳を覗き込んでくる早乙女から目を外した。それだけだった。ただ一言、おれは言葉を交わしただけで、心を奪われてしまった。恋は盲目と言うが、おれの場合、目が全部見えなくなった上に、耳がまったく聞こえなくなったぐらいの状態だった。

おれはいつのまにか、女性と接することが苦手になっていた。高校生の頃は堂々としていたのに、女性に苦手意識を持つようになった。

ていた。その理由は、自分の容姿に対するコンプレックスだ。普段、女性と接しないので、どう接していいかわからなくなっていたのも一つの要因だと思う。

週に一度の早乙女との実験が楽しみだった。本当のことを言うと、この話をするには大変勇気がいるのだ。きみは、おれのことを笑うかもしれない。あるいは、おれの妄想癖にあきれることだろう。

というのも、おれは恋をただけではなく、なぜかその時、早乙女がおれに惚れていると思ってしまったのだ。栄子の時の経験が、まったく活かされていない、きみは思うかもしれない。

しかし、多くの人が恋愛で考えることは、自分が好意を持っている人間に対して、相手も好意を持っていると思いがちだ。だから、おれの考えも、その極端をいったもので、特別おかしいことではないのだ。

以前、おれの理系の友人で、こういうことを言う人間がいた。おれ達はカラオケに歩いて向かう途中の出来事だった。

「なあ。相談があるんだけど、聞いてくれる？」

「ああ、いいよ」

「おれ、初めて好きな人ができたんだよね」

「そうか。よかったじゃん。どこで知り合ったの？」

「中学の同級生。同窓会でひさしぶりに会ったんだ。昔は、なんとも思わなかったんだけど、すごい可愛くなって」

「そうか。よかったな。で、見込みはありそうなの？」

「ああ、たぶん、彼女もおれに惚れているから」

「本当に？ どうしてそう思うの？」

おれは驚いて聞き返した。確かにおれの友達は、普通よりかっこいい男だったが、なんだかそんなにうまい話は信じられなかったのだ。

「だって、ドラマだと最終的には両想いになるじゃん。だから、おれの恋愛も両想いになるよ」

おれの友人は賢く、一流の大学に通っているのに、まるで理論的

ではない答えだった。おれは少し考えてから答えた。

「本気で言っている？」

「本気だよ」

おれの友達は少し声を荒げた。

「ばかにしてる？」

「いや、ばかになどしていないよ」

おれは心の中で友人を笑った。これだから理系の男はだめなのだと思います。

しかし、今思い起こせば、おれもまったく同じ勘違いをしていたのだ。友人を笑った当時のおれの話を聞いたきみは、同じくおれに對して失笑するだろう。

早乙女と実験の時に話すようになってから、他の講義をしている時も早乙女が存在が気になるようになっていた。授業に集中しないで、早乙女の横顔ばかり眺めていた。おれは元々女性を眺めているだけで楽しめるタイプの人間だったので、それだけで日々がカラフルに感じられた。

休憩時間に、すれ違うと、一言二言会話をするようになっていた。早乙女はおれが教室を出る時、教室の廊下でいつも誰かを待っていた。おれには、早乙女がおれを待っているように感じた。おれと同じように、早乙女もおれと話すことを楽しみにしているように考えてしまったのだ。

そんな日々を繰り返すうちに、時間だけが過ぎていった。早乙女との距離を縮めたいのに、いつまでも縮めることのできない自分にも苛立っていた。

ある日、講義の休憩時間に、廊下の壁に寄りかかっている早乙女に話しかけた。早乙女の瞳を見ると、何でもできる気がした。携帯のアドレスを聞くと、早乙女は心よく教えてくれた。

早乙女はその頃からだったか定かではないけれど、特定の男とベンチに座って話すようになっていた。でも、おれにはそれが早乙女の彼氏には思えなかった。言葉で言い表すのは難しいけど、早乙女

とその男が作りだす空気が、付き合っている人達が出すものとは、別のものに思えたからだ。

おれはいつしか、早乙女への想いが抑えきれなくなっていた。その想いをどうしても伝えたくて、自宅からメールを送って告白した。メールで告白など、信じられない人が大多数だと思う。なぜ会って告白しないのか、きみはそう思うかもしれない。感情が盛り上がってしまい、会って告白するまでの時間が待てなかったのだ。いまずぐに、好きだと伝えたかった。おれの気持ちを、わかってほしかった。

「突然だけど、早乙女さんのことが好きなんだ。付き合ってほしい」メールを送ってすぐに、返事が来ていないか、何度も携帯をチェックした。しばらくして、早乙女から返事が返ってきた。

「同じ学科に、彼氏がいるから付き合えない。ごめん」

おれの勘は外れていて、大学のベンチで見た男が彼氏だったのだ。おれはいてもたってもいられず、外に出て、近所をうろろしながら早乙女に電話をした。

早乙女は愛想よく電話に出てくれた。おれは特に恋愛になると、感情がコントロールできなくなる。これは、昔からの悪い癖だった。早乙女と世間話をしながらタイミングを見計らって、もう一度おれは切り出した。

「早乙女さん、付き合ってほしいんだ。本当に、早乙女さんのことが好きなんだ」

「彼氏がいるから、ごめん」

「本当に、彼氏のことが好きなの？ 脅されているんじゃない？ 本当はおれのことが好きなんじゃない？」

完全な、自意識過剰と妄想だった。一步間違えば、ストーカーになっていた。おれはなぜかこの時、早乙女は、本当はおれのこと好きなのに、何者かに脅されていると思ってしまったのだ。根拠はまったくない。だけど、その当時のおれは本気でそう思っていた。

「別に、脅されてなんかいらないよ」

「そっか。じゃあ、諦めなくちゃいけないんだね」

「うん」

それ以上、早乙女が言葉を続けなかったのも、おれは告白した興奮を抑えきれず、一時間ぐらい自分のことを一方的に話した。

今は書いていないけど、いつか小説家になりたいという話をする
と、早乙女はおれのことを尊敬すると言って何度も励ましてくれた。

おれの独りよがりな夢の話を真剣に聞いてくれる早乙女に対し、
深い共感を覚えた。振られてしまったけど、早乙女を好きになって
よかったな、と思った。それぐらい、誠実な女性に感じられた。

おれは気持ちが抑えきれなくなったら、また告白するかもしれない
いと伝えてから、電話を切った。なんだかすがすがしい気持ちだっ
た。振られたけれど、自分の気持ちを伝えられて、その気持ちを早
乙女に理解してもらえたことが、嬉しかった。だけど、それ以降お
れが早乙女に電話したことはない。

自宅に一人になると、落ち着かなくて、他愛もない話をいろんな
友人に電話して話した。振られたことは誰にも言わなかった。

時間が経つにつれ、爽快感はなくなり、気分は落ち込んでいった。
だけど、初恋の時のように、泣いたりはしなかった。おれは、大人
になっていたんだ。だから、振られて泣かないのなら、これ以上悲
しいことはないのも、二度と泣かないと当時は思った。

ただ、振られたと同時におれにかかっていた恋の妄想という魔法
は消えて、早乙女が特別な存在ではなく、可愛いけれど普通の人間
であることに気がついた。恋とは本当に不思議なものだと思った。

告白してから数カ月経ち、研究室を選ぶ際に、早乙女とメールを
した。早乙女はおれと同じ研究室を希望しているという噂を聞いた
からだ。確認してみると、事実だった。

「振ったことなんか気にしないで、今はなんとも思っていないから一
緒でも大丈夫だよ」

「同じ研究室に行きたいけど、悪いから遠慮する」
気にしなくていいのとおれは思ったが、早乙女が決めることな

ので、それ以上は言わなかった。

研究室は別々に配属されたけど、早乙女はよくおれが配属された研究室に昼飯を食べに来た。仲のよい女の子がいたからだ。

おれはきまづさを感じたが、早乙女と特に会話したりはしなかった。たまたま他の人が席を外して、早乙女と二人きりなる時もあったけど、特に話すことはなかったので、黙っていた。早乙女も積極的におれと会話する気はないらしく、たまに世間話をするくらいだった。

早乙女との思い出と言えば、こんなところだろうと思う。彼女は有名な会社に就職が決まったと聞いた。同じ研究室の女の子は、可愛い女性は就職活動でも有利だと話していた。そういうことは、現実にあるかもしれない。おれは早乙女が、恋愛でも会社でも成功していてくれたらいいと思う。これが、おれが大学時代で経験した恋愛だ。

細かい話をすれば、もっとたくさんあるけど、大学時代に振られるまで至った話は早乙女くらいだ。

きみはここまで読んできて、どう思っただろうか。結果だけみれば、おれは大学時代に女性と付き合いたいと思っているにも関わらず、一回も付き合うことができなかった。それはさびしい青春だったかもしれない。

女性に愛されたい、愛したいという思いがいつも空回りしていた気がする。そんな自分を長い間見て見ぬ振りをしてきた。

おれは、恋愛に理屈はいらないと考えている。人が人を好きになる理由をうまく説明できたとしても、きっと後から考えてもっともらしく話すだけだ。本当は、言葉では表現できないような、もっと深いところで人と人は惹かれあっているのだと思う。

だから、どんなに女性を言葉で説得しようとしても、おれに興味のない女性を言葉で説得することはできない。

それはきみに指摘されなくても、十分わかっているつもりだ。それでも、おれが言葉で女性を説得しようとしてきたのは、恋人がど

うしても欲しかったからだ。自分が、異性にとって、魅力的な人間であると思いたかったからだ。愛を感じたかったからだ。

おれの言葉や想いは早乙女に届かなかったのだろうか。それは、早乙女にしかわからないことだ。

きみは、好きな人に、自分に興味を持ってもらおうと、アプローチしたことはあるだろうか。きみならば、もっとよい方法を考えたのかもしれないね。

言葉によるアプローチというのは、あまり有効な手段ではないのかもしれない。もしくは、おれの行動や言葉の重みは軽いと思われていたのかもしれない。

人の魅力というのは、本当に不思議なものだ。人によって、惹かれる部分が違うからだ。好みにも、個人差がかなり大きいからだ。ある芸能人が好きな人ランキングで上位に入っているのに、同じ芸能人が嫌いな芸能人ランキングの上位に入っていたりするからだ。

元々人から好かれやすい容姿や性格を持つ芸能人ですらそうなのだから、一般人にとっては、人から好かれるということはいかに難しいことかは容易に想像できる。だからといって、自分がモテないことを正当化しているわけじゃない。

いつか、愛し愛される存在の人ができたらいいと思う。きみにも、そういった存在の人と末長くうまくいてほしい。

ただ、ここまで読んでくれたきみは、愛情ではないかもしれないけど、もうすでにきみとおれの心の中で何らかの感情を交換している。きみがおれとの交流が、価値あるものだと感じてくれると嬉しい。

さあ、続いて、海外旅行の話をしよう。きみは、生まれた国を出たことがあるだろうか。異なる文明に触れることは、多様な価値観が世界にあることを教えてくれる。同じ国の中でも様々な価値観があるのだから、国が違えばもっと価値観は違う。それを実際に目にするだけでも、視野が広まる。素晴らしい体験だ。そんな海外旅行

の体験を書きたい。

七 由紀を怒らせた理由

大学四年生の夏休みにサイパン、卒業旅行の時にイタリアとタイに行った。

サイパンには、男二人で行った。初めての海外は驚きの連続だった。何しろ、言葉が違う、食事が違う、風景が違う、何をとっても異体験だった。確か二泊三日だったと思うけど、毎日晴れ渡っていて、爽快だった。

サイパンでは、ダイビングのライセンスを取りに行った。毎日海に潜って、サンゴを見た。チンアナゴという、珍しい海の生き物を見ることができた。

滞在している時は毎日浜辺から夕陽を見た。本当に素晴らしい光景で、時間がゆっくりと流れていて、刻一刻と変わる光と色の変化を楽しんだ。これが異性との旅行なら、ロマンチックでもっと最高だったと思う。

タイには、男四人で行った。寄ったのは、プーケットとバンコクだ。プーケットでは、ダイビングしたり、川遊びをして、滝に打たれたりもした。おれは勇気が出なくてバンジージャンプはできなかったけど、友達が飛び込むのを見ただけで楽しかった。特に感動したのは、プーケットで食べた屋台のチャーハンがおいしかったことだ。タイ飯は、チャーハンとよく合う。

バンコクでは、遺跡を観光したりして面白かった。水上マーケットでは、アジアでしか味わえない雑多な空気が好きになった。

おれは様々な国に旅行させてもらったが、おれに海外旅行する機会を与えてくれた多くの国に、本当に感謝している。

今回話すのは、イタリアでの出来事だ。なぜイタリアだけ話すのかと言えば、その理由は簡単だ。もう、きみも気づいているかもしれないが、それはおれが恋をしたからだ。この小説の形式で描かれ

た手紙のテーマの一つは、愛だからだ。だから、おのずと、恋愛中心の構成になっていく。

おれは自分ではそんなことはないと思っていたけれど、今思えば、愛に飢えていた。長い間、ずっとだ。まともに付き合ったのは、琴美との二カ月だけだ。栄子とは、付き合ったとは言えないくらい短かった。

おれは、大学の男友達五人とイタリア旅行に行った。イタリアではバスツアーだった。イタリアでは、ミラノ、フィレンツェ、ヴェネチア、ローマ、バチカンと様々なところを周った。

おれはバスツアーが好きだ。バスツアーで一週間周ると、いろんな人とだいぶ仲良くなれる。バスツアーの乗客は全員日本人で、大学の卒業を控えた女性が多かった。おれは新たな出会いを予感した。バスツアーには、背が小さく童顔で可愛いらしい女性もいれば、背が高く大人っぽくてきれいな女性もいた。

日本人の男性が持つ女性の好みは多様だ。日本ほど、多様な国はないかもしれない。太っている人が好きな人もいれば、痩せている人が好きな人もいる。年下が好きなの人もいれば、年上を好きな人もいる。背が低い人を好きな人もいれば、背が高い人を好きな人もいる。きれいな人が好きな人もいれば、かわいい人が好きな人もいる。

もしかしたら、日本の男性だけではないのかもしれないけど、様々な願望を持った人達が日本にはいるということだ。日本人はよく個性がないと言われるけど、女性の好みに関しては個性的だと思う。

きみはどんな異性が好みだろうか。異性ではなく、同性が好きな人でも構わないのだけど、ここでは、話を広げすぎないために、きみが異性を好きなことを前提に話を進めよう。

おれは、異性の容姿や年齢や経済力が、好きになる条件を、すべて決めているとは思わない。もし、そういったもので好きになるかどうか決まっているのだとしたら、かなりの人が、一人の人間を好きになるという、一極集中現象が起きると思う。でも、現実はそのじゃない。人を好きになるというのは、なんとなくなんだと思う。

なんとなくというところ、あいまいな感じがするけど、ただ、言葉で表すのが難しいだけで、好きになった本人にとっては、確信のあるものだ。心と体が相互に影響し合った一人の人間を好きになる時に、どこを見て好きになったかを言葉では十分に表現できない。個人的には、そう思う。話を戻そう。

バスツアーで周っているうちに、おれの友達の一部が由紀に目をつけて、積極的に話しかけた。由紀は日本人にしては背が高く、すらりと伸びた手足はモデルのようだった。タイトな服は着ていなかったけど、もし着ていたら、女性特有のラインが魅力だったに違いない。

ツアーの序盤では、おれはあまり由紀と会話をしたりしなかった。旅先で、女にがつついていいると思われるのも癪だったからだ。友達が積極的に由紀と話しているのを見ると、おれは少しずつ由紀のことに興味を持つようになり、やがて由紀の言動を気にかけるようになった。

由紀と初めて話した時は、バスの中でのことだ。由紀が、積極的に話しかけていたおれの友達を褒めていたので、そんな由紀の言葉に嫉妬し、彼には彼女がいるよと告げ口した。今思えば、幼い行爲だったが、由紀にはおれの友達より、おれに興味を持ってもらいたかったのだ。

由紀は、おれの友達に彼女がいると聞いてもあまり気にしていないようで、その後も陽気に話し続けた。もつと由紀と話していたかったが、バスを降りて見学する時間になったので、それで由紀との会話は途切れた。

旅行の終盤でローマに行った時、バスツアーの何人かで、夕食を食べに行った。その中には、おれの友達だけでなく、由紀もいた。豪華なイタリア料理に感動しながら食べていると、由紀が遠慮して自分の注文した料理だけに手をつけていた。

「由紀さん。同じツアーの仲間なんだから、おれたちの料理も食べて大丈夫だよ」

「いいの？　ありがとう」

おれはその言葉を聞いて、由紀の中でおれの評価が少しでも上がればいいと思った。笑いの絶えない、楽しい食事をすることができた。

夕食後の帰り道に、美術館か博物館の近くで、アカペラで歌っている人達の歌を聞いた。

ローマの澄んだ空気と歌声がマッチしていて、神秘的なものに思えた。おれは歌声に感動しつつも、さりげなく移動して、由紀の隣に立って聞いた。由紀は真剣に歌声を聞いていた。由紀と手をつなぎたかったけれど、我慢した。

歌を聞き終えてホテルに帰る時、おれは由紀と並んで歩くことが運よくできたので、たくさん話をした。歌を聞いてテンションが上がっていたのは由紀も同じだったらしく、会話はかなり盛り上がった。ローマの夜の街並みも気分を盛り上げた。

由紀とは、お互いの家族構成や大学のことなどを話した。普段の生活のことを話してくれるのは、心を許してくれている証拠だと感じた。

泊まっているホテルが近づくと、由紀が今まで話していたのと変わらぬ調子で言った。

「自由行動の日に、二人で一緒に周らない？」

おれは由紀から発せられた意外な提案に驚きつつも、答えた。

「もちろん、大丈夫だよ」

「ありがとう。楽しみだね」

「すごい楽しみ」

ホテルに着いたので、お互いにお休みとあいさつして、それぞれの部屋に戻った。

ホテルの部屋で、由紀との話を大学の友達に話すと、散々からかわれた。でも、みんないいやつで、別行動をすることの了解をもらうことができ、頑張ってきたよと励まされた。まさかイタリアに来て女性とデートできるとは思っていなかったので、おれの顔はにや

ついて仕方なかった。

自由行動の日、おれは由紀と大学の友達一人と三人でバチカンに向かった。バチカンまでは、ガイドがタクシーを手配してくれたので助かった。

大学の友達のうち、三人はショッピングをしようと買って買い物に出かけたが、一人はバチカンに行きたいと言ったので、三人でタクシーに乗った。彼はバチカンに着いたら別行動するから、二人で楽しんで話してくれたので、特に気にしてはいなかった。

バチカンに着いたら、予定通り、おれは由紀と二人で周ることができた。最高に幸せだった。バチカンは予想以上に広く、景観として素晴らしいものだった。

おれは由紀とデートしていることに感動したのか、バチカンに感動したのか、おそらく両方なのだろうけど、とにかく満たされた気持ちでいっぱいだった。

由紀は、おれを自分の兄に似ていると言った。実際似ているかわからないけど、親近感を持ってくれていることは確かだった。兄弟に対して、愛情を持っていることも伝わってきた。

おれは由紀と日本に帰って二度と会えなくなることが嫌だと考え、絵画を見つめる由紀に聞いた。

「携帯のアドレス教えてもらってもいい？」

勇気を出して聞いてみると、あっさりと許してもらえた。

「いいよ。ちょっと待ってね」

由紀が携帯を探している間、ついで思い切って誘ってみた。

「日本に帰ったら、二人で遊びに行かない？」

「由紀も遊びたいと思っていたんだ」

そう返事をしてくれた由紀に対し、おれは有頂天だった。彼女ができるかもしれない、その時は本気で思ったんだ。

バチカンドートが終わった後、旅行中は由紀とあまり会話するチャンスがなくて、日本に戻ってから頑張ろうと思ったんだ。

日本に戻ってから、おれはさっそく由紀をデートに誘った。大学

の友達に、デートに行くなら水族館と言われていたので、経験の少ないおれは素直に従い、水族館に行った。

水族館でも由紀はよく笑い、いい雰囲気だった。由紀はイルカのショーの写真を撮っていた。そんな由紀のはしゃいだ横顔を見るのが好きだった。一緒に食事をしている時も、会話には困らなかった。イタリアでの共通の思い出が、二人の気持ちをつないでいたからだ。海に住む様々な生き物を見ながら、次のデートの約束も、そつなく取り付けることができた。由紀が幸せそうに笑うと、おれも幸せな気持ちになった。一緒にいるだけで、心が風船のようにふわふわと上昇していった。

おれはデートの帰り道、由紀に告白するか迷った。告白自体を迷ったのではなくて、いつ告白するかに迷った。今日告白すべきか、それとも次のデートで告白すべきか、悩んでいた。

おれは今まで自分から告白しても、成功率がゼロだったので、判断に迷った。だから、由紀を途中まで送ることにした。

でも、きみにはわかっていているかもしれないね。おれは、本当に小心者なんだ。直接目を見て、告白するのが苦手なんだ。だから以前、メールで告白してしまった。よくないというのはわかっていているんだけど、どうしても、内気な性格が表れてしまう。

結局、由紀を送っていく間も、告白することはできなかった。次のデートでは絶対に告白しようと思った。

数日後、おれは由紀に次のデートを申し込んだ。だけど、由紀の返事は予想外のものだったんだ。由紀は、おれのデートを断った。おれは焦った。ひさしぶりに巡ってきたチャンスを、逃したくなかった。由紀がおれの何を気に入らないのか、わからなかった。

おれは由紀にしつこくメールを送った。ストーカーになりかけていた。急に態度を変えた由紀の態度に納得がかなかった。

おれは何日もかけて、由紀をメールで説得した。由紀は、電話は苦手だからしたくないと言っていたので、電話はしなかった。

友達に相談すると、そういう時は押しまくれとアドバイスされた

ので、しつこく連絡した。

「逃げる女が好きなの？」

ある時、由紀から返事が来た。

「そうかもしれない」

おれがそう答えても、結果は変わらなかった。どうにもならなかったので、おれは苛立っていた。つい興奮したメールを由紀に送ってしまった。

「先に興味があるように振る舞ったのは由紀じゃないか。思わせぶりな態度をするなんて失礼だ」

「そんな人とは思わなかった。もう連絡して来ないで」

由紀のメールを読んで衝撃を受けた。イタリアでの楽しい思い出が、急に色あせたようだった。おれはふと我に返って、由紀にメールを送った。

「ごめん、もう二度とメールしないよ」

おれは由紀からの返事を期待したが、返事はなかった。携帯から、由紀のアドレスを消した。

今、由紀は元気でやっているだろうか。教師になると言っていたが、教師としてうまくやっているのだろうか。おれはもう、由紀に連絡することはできないが、生徒に慕われるような先生になっているといいなと思った。

これが、おれが由紀を怒らせた理由だ。おれは確かにしつこかったかもしれない。でも、それは、自分が愛されていると感じたかったからだ。女性を愛してみたかったからだ。本当に、ただそれだけのことなんだ。だけど、やっぱり、言葉だけでは、人を振り向かせることはできない。会って、目を見て話せば、結果は違ったかもしれない。人を愛することが、こんなに難しいとは思わなかった。

きみには、恋人がいるだろうか。愛する人はいるだろうか。おれには、家族はいるが、恋人はいない。だからこそ、きみには、好きな人と幸せに生きてほしい。そう願わずにはいられない。

次は少し時間を戻して簡単に就職活動の時の話をしてから、就職

した時のことを話したい。

八 仕事をうまくできない理由

おれは大学三年生の頃から、いじめられ始めた。そのために大学に痛くないと思い、大学院への進学を諦めた。大学院に行く気はなくなっていたけれど、研究職には興味があった。そうでなければ、文学部に行かずに工業大学に残った意味がないと考えていた。だから、大卒でもなれる研究職に応募した。結果は散々で、軒並み落ちまくった。おれは速読のインストラクターとして働けばいいと思ったが、面接をするまでもなく、断られてしまった。

何十社と面接を受けたが、内定をもらえたのは、二社だけだった。もちろん、研究職ではない。そのうちの一社は、一般的な大卒の初任給より二万以上給料が低く設定されていたので、当然給料の高い方を選んだ。

おれが就職することになった会社のことをX社と呼ぶことにする。X社では、研究施設がなく、田舎の工場勤務か都内で営業職しかなかった。

おれは理系だったので、当然、工場勤務を囑望された。でも、おれは営業をやりたいと告げた。理由は、東京でしか、速読を習えなかったからだ。それぐらい、おれにとって、速読は魅力的だった。

これからきみに、おれの仕事をする上でお世話になった二人を紹介する。

その前に、簡単に、営業部について説明すると、営業の部屋は二十人程度の座席が確保されており、席数の割にかなり窮屈な間取りだったが、机も壁も新しかった。英語圏の国には、営業支社があった。

おれがまだ配属されたばかりの頃、おれに仕事を教えてくれたのは、風早だ。風早は長身で、手足がすらりと伸びていてスタイルが良い女性だ。とても四十台には思えない。顔の印象は、つり目でき

つそうな性格に見えたが、最初の声の印象は優しかった。風早は派遣社員だったが、正社員の間よりも仕事ができた。

風早と対照的に背の低い富田が、おれの上司だった。白髪まじりの富田はサラリーマンなのに、うっすらと無精ひげが生えており、厚ぼったい顔をしていて、いつも目の周りが腫れていた。

富田は一時間に一回は、喫煙所にたばこを吸いに行く癖があり、がりがりに痩せてはいたが、声に迫力がある人だった。

おれがまともに富田と話したのは、二人で飲みに行った時だ。富田はX社近くの居酒屋におれを連れて行った。富田は店に入っただん、生ビールを頼んで、たばこを吸いだした。

「生ビールは飲めるよな？」

「はい」

営業に配属されておきながら、今さら生ビールが嫌いだとは言いがぶらかった。たばこも苦手だったが、嫌とは言えなかった。

「ところで、風早のこと、どう思う？」

「どうって」

おれはとりつくろって答えた。

「きれいな人だと思いますよ。親切な人だし。それに仕事もできそうだし」

「確かに風早は派遣社員の割に仕事はできる。だが、本気でそう考えているのか？」

「ええ、本気で思ってますよ」

「そうか。ならいいがな。アシスタントの風早に嫌われたら、お前の社会人人生は終わりだからな。気に入られるように、よく気を配るんだぞ」

「わかってます」

おれは唾を飲み込んだ。

「それよりおれもジョッキが空いているだろう。注意して見ていろ。すぐに生を注文するんだ」

「すいません」

「それより、鈴木、お前はあんまり飲めないのか。ん？ 正直に言ってみろ」

「実はお酒は苦手です」

「そうか。じゃあ今日はたくさん飲ませて鍛えてやる。いいか。今日はたくさん飲め」

おれは嫌だとは言えず、曖昧に頷いた。営業マンはお酒を飲むものだときは信じ込んでいた。富田に言われるがままに生ビールを飲み続け、帰宅途中に何度も吐くはめになった。

こういう風に書くと、富田はパワハラをしているように思えるが、いや実際にそうだったのだけど、フォローするならば、やさしい一面も持っていた。飲みに行くと、必ずおごってくれたのだ。そういう意味では、気前のいい人間だった。

今度は風早の話をしよう。風早はおれが配属して、少し経つと、おれが朝、会社でおはようございますと声をかけても、無視するようになった。おれには、理由がわからず、旅行した時のお土産を渡して気を引こうとしたが、風早のおれに対する態度は悪化していた。

風早がおれに取る態度は、二種類だった。おれの発言や行動を無視するか、もしくは一方的に怒るかだ。

ある時、仕事が終わらないおれに対し、風早はおれの前に立った。おれは椅子に座っていたので、身長の高い風早はいっそう威圧感が増していた。風早は元々つり上がっている目をさらに細くしておれを睨みながら、何分にも渡って、説教をした。

これは、社会人になって初めて受けた屈辱的な行為だった。大勢の前で、一方的に説教される。どれだけおれが劣っているかを、延々と語られる。おれはただ、黙って耐えるしかなかった。

怒られた理由もひどかった。コピーした紙が曲がっているなど、およそ重要ではないことで、怒られた。しかも、おれには曲がっているように思えなかった。

それからは、X社で風早におれが怒鳴られながら怒られるのは、

日常茶飯事だった。何十分にも渡って説教された時もある。それに
対し、おれができるのは、ただひたすら謝るということだけだった。
逆らって意見したことは一度もなかった。逆らっても、風早を逆
に興奮させるだけだとわかっていたからだ。

おれはそれでも、毎日、風早に対して、おはようございます、お
疲れ様です、と声をかけ続けた。風早から返事が返ってくることは
なかったが、社会人としての礼儀として、声をかけ続けた。いつか
風早もわかってくれる日が来る、そう信じていたからだ。誠意は伝
わるものだと思ったからだ。

でも、風早の態度は日増しにひどくなっていた。お土産を渡し
た時も、渡すタイミングが悪いと、怒られた。プレゼントをしても
怒られるなら、関わり合いにならない方がよいと考えるようになって
た。

おれが風早に怒られている時、富田は黙って気付かない振りをし
ているか、たばこを吸いに席を外した。おれの社会人生活のスター
トは決して順風満帆とは言えなかった。

きみはどんな社会人生活を送っているのだろうか。それとも学生、
もしくは仕事を引退しているのかもしれない。

もしきみが社会人なら、社会人としての生活というのは、人生に
おいて、重要な時間だ。多くの人にとって、学生の時間よりも、退
職後の時間よりも、社会人である時間の方が長いからだ。人の一生
の中で、仕事をした時間というのは、あまりにもウェイトが大きい。
きみは今の仕事に満足しているだろうか。満足している、と答え
る人は少ないのかもしれない。もっと、自分に合った職業があるは
ずだ、そんな風に考える人が多いのかもしれない。

おれが思うに、きみのしている仕事は価値あるものだ。きみがど
のような仕事をしているにせよ、需要があるから、価値あるものだ
から、働くことができる。

きみが働くことで社会に貢献しているように、おれもきみへの手
紙を書くことで、きみやきみを取り巻くすべてのものに、幸福と平

和が訪れるといいと思う。

今まで女性に振られた話ばかりしてきたから、今回の話は意外だったかもしれない。もちろん、社会人になってからも、恋愛はした。そのことも当然書いていくけど、その前に、もう少しだけ社会人として働いている話を書いて行くよ。きみが、最後まで、飽きることなく、読み進めてくれることを願う。

九 夜遅くまで残業するようになった理由

おれは社会人になるまで、たいして英会話に興味を持っていなかった。

そんなおれが、社会人になってから、英会話に興味を持ったのは、友達から、無料の英会話をやっているところがあると聞いたからだ。それでも、おれは行く気はなかった。それよりも、会社で風早にいじめられていることの方が気がかりだったからだ。

おれが就職してから数カ月すると、最寄り駅で、スーツを着た人が、英会話を無料で教えているので来てほしいというビラを配っていた。他の駅では配っていないのに、なぜおれの最寄り駅だけ配っているかは、その時は疑問に思ったりしなかった。スーツを着た男は、おれが通ると、毎回話しかけてきた。おれは適当に聞き流していた。

だけど、季節が冬に変わった頃になって、英語を話せない風早を英会話なら見返せると思い、話しかけてみることにした。

その日は、本当に寒い日で、手袋もせずにスーツを着た男は手をこすっていた。おれは温かい缶コーヒーを二つ買って、一つを彼に渡そうと思って、話しかけた。

英会話を習ってみたいと、たどたどしい英語でおれが言うと、彼は笑顔でビラを渡してきた。会話をしているうちに、寒そうなので缶コーヒーを渡そうとした。彼は表情が変わり、はっきりとした口調でいらないと言った。

彼の表情に笑顔はなかった。おれは彼が手を寒さでこすっているのに、なぜコーヒーをもらわないか、わからなかった。コーヒーが嫌いなかもしれないし、何らかの理由で、ものを受け取ってはならなかったのかもしれない。

数日後、おれは英会話を無料で教えてくれるという、指定された場所に行ってみた。アパートの大部屋だった。

最寄り駅でビールを配っていた彼が、また会ったね、と話しかけてきた。それから、おれに特別に、みんなとの集団授業を終えた後に、三十分無料で英会話を教えてくれると言った。

当時のおれはなんて親切な人なのだろうと、感動した。だけど、一緒に集団授業を受けていた日本人の態度が悪かったので、そこに顔出すことはやめて、英会話学校で習うことにしたんだ。

きみは、英語を話すことができるだろうか。おれは正直、あまり話すことができない。言葉は意思伝達において、重要だ。しかし、島国の日本にいと、一カ国語話せれば問題にならないので、なかなか身に着かないのも確かだ。

おれは風早を見返そうと、英会話学校に毎日行って勉強していた。おれの最終目標は、英語が話せるようになって、海外の支社で働くことだった。

2008年になって、半年以上働いたこともあり、仕事にも慣れて来た。そんなある日、おれがいつものように、仕事後に英会話学校に行こうとすると、富田が呼び止めた。

「鈴木、今日は飲みに行くか」

早く家に帰ったかったが、風早と対立している以上、富田とは友好な関係を築いておかねばならなかった。

「いいですね。飲みに行きましょう」

「風早も飲みに行くか」

富田は風早にも声をかけた。

「行かない」

風早は一瞬おれを見てから、視線をパソコンに戻した。

「そうか。じゃあまた今度な。鈴木、行こうか」

「行きましょう」

安い居酒屋に着いて、生ビールを注文すると、すかさず富田は本題に入った。

「風早がお前のことを気に入らないのはなんでだと思う？」

「わかりません」

「考えてみる」

おれは考えた。もうこれ以上人と対立することは嫌だった。真剣に考えたが、どうしてもおれには理由がわからなかった。

「やっぱり、わかりません」

富田はやっぱりな、と言いたげに鼻を鳴らした。

「風早はな、お前が先に帰ることが気に入らないんだよ」

おれはその言葉を聞いて、そんなことが原因だったのかと、後頭部を椅子で強打されたぐらいの衝撃を受けた。

「じゃあ、どうすればいいんですか」

「おまえは毎日風早が仕事終わるまで待っている」

おれはすぐに返事をするのができなかった。意味もなく、おしぼりを握った。

「いや、か？」

富田はすわった目でおれを見た。

「わかりました。でも、本当にそうなんですか。なんだか信じられないですよ」

「別に信じたくないなら、信じなくていい。ただ、鈴木は一生風早と仲が悪いままだな。おれとしてもグループ内の仲が悪いと困るんだ」

そう言われると、反論できなかった。

「わかりました。富田さんの言う通り、実行してみます」

その日も、おれはかなり飲まされたが、吐くことはなかった。次の日から、おれは毎日、風早が仕事を終えるのを待った。

風早は、定時を過ぎても帰る気配がまったくなかった。風早が夜

遅くまで仕事をしていることを初めて知った。

おれは仕事もないのに、パソコンで英語の勉強をしながら、風早が仕事を終えるのを毎日待った。それはとてもつらい時間だった。英会話学校で自習したいのに、自習することができなかった。毎日、終電ぎりぎりです。

夕食を深夜の一時頃に食べ、六時に起きるという日もあった。だけど、忙しいサラリーマンなら、それぐらいは普通なのかもしれない。

問題は、おれは忙しいわけでもないのに、毎日夜遅くまでX社にいたことだ。それでも、英会話学校で授業がある日を除いて、おれは決して風早より早く帰ることはなかった。

おれは通信教育でも英語を習い、二・三カ月でTOEICの点数が三百点近く上がった。

TOEICはX社で受けたので、風早もこれでおれのことを見返すだろうと思った。社内の掲示板に成績優秀者として、おれの名前が貼り出されても、風早の態度は変わらなかった。おれのTOEICの成績にはまったく触れなかったし、いつも通りに、おれを怒鳴り続けた。

風早はなぜ、執拗なまでにおれを怒ったのか、富田はなぜおれに風早が仕事を終えるまで待つように言ったのか、当時のおれには理由がわからなかった。今だって、わからない。だが、まったく予想がつかないわけじゃない。だけど、やっぱり現状では、予想の範囲内だ。とりあえず、話を続けて先に進もう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0228s/>

親愛なるきみに捧げる一通の手紙

2011年3月29日14時10分発行